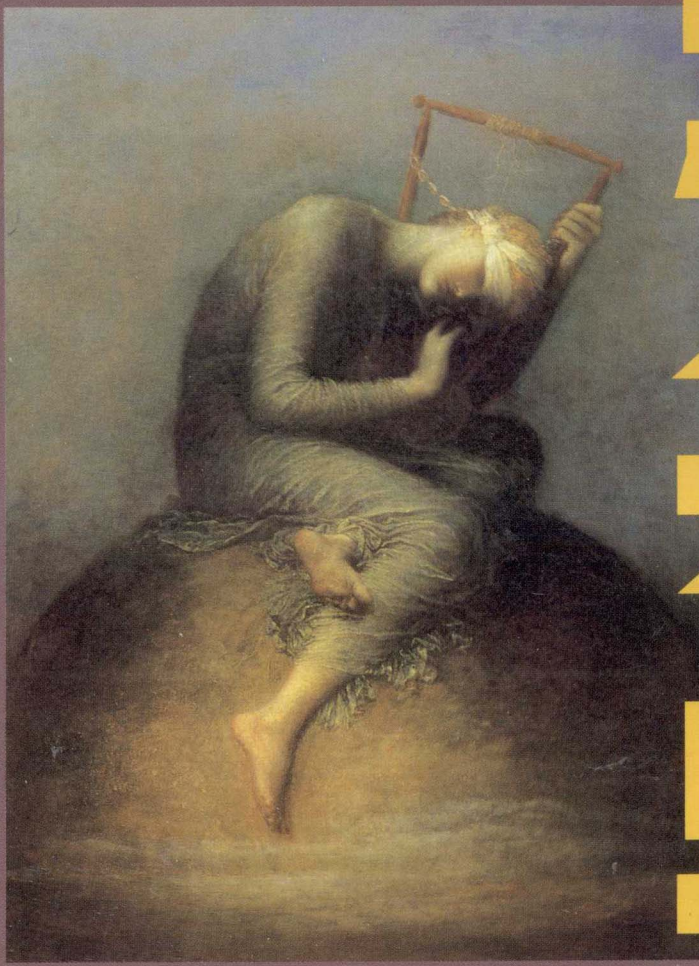
久石譲

ピアノ・ロスト



パラダイス・ロスト
一九九四年十月三日　初版第一刷発行

著　者　久石　譲
発行者　石渡知徳
発行所　株式会社　パロル舎
東京都文京区本郷二―四―一三
電話　東京三八一三―三〇四六

組　版　スマイル企画
印　刷　モリモト印刷＋東光印刷
製　本　星興社

END OF THE WORLD
Words & Music by Sylvia Dee and Arthur Kent
© 1962 by ARTHUR KENT MUSIC CO. and EDWARD PRAFFITT MUSIC
Rights for Japan controlled by TOSHIBA-EMI MUSIC PUBLISHING CO., LTD. and FUJIPACIFIC MUSIC, INC.

日本音楽著作権協会(出)許諾第9471568-401

パラダイス・ロスト

久石譲

パラダイス・ロスト＊目　次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

1 あらかじめプログラムされていたマイヤ。……7
2 デジタル表記の0と1の間にはミクロの世界が存在する。……24
3 夏子はまるで少女のように危険な摩天楼と友達になった。……51
4 僕の中の一つのロンドンは終わったのかもしれない。……67
5 あんたは偶然という奴を信じますか？
そして冴恵はサウスイーストの季節風に乗って現われた。……87

6 女はひとつ恋する度に前へ進み、男は振り出しに戻る。……119

7 僕はいまパリにいる。だがそんなことは誰もしらない。
そして、サティは無造作に僕の前の椅子に腰かけ足を組んだ。……135

8 ザクロのように真っ赤な血の滴る。……166

9 楽園にいる人は楽園を歌うことはない。……199

1 あらかじめプログラムされていたマイヤ。

それは漠然とした思いであったし、形のない意思でもあった。

「何かを変えなければ……」

不満があったわけでもないし（もちろんないわけでもないが）作曲家として大きな問題を抱えていたわけでもない。

でも、もう一人の自分が赤色の信号を点滅させる。

「昨日と同じ自分であってはならない」と。

そして僕はロンドンに渡った。

フォーティーになったらピアスをしようと思っていた。なぜか理由はないのだが、フォーティーだからこそ（やりそうもないそれをすることに）意味があるように思えた。

オックスフォードストリートはロンドンで最も賑やかな通りであると同時に狭い道幅のためか一日中、バスやタクシーのクラクションが鳴り響く喧騒の街でもある。セルフリッヂはその

ストリートに面していて、ロンドンで一番大きなデパートの一つだ。
ある日、僕たちはそこの一階にあるアクセサリー・ショップ？　に行った。
「私がプレゼントするわ」マイヤがいった。
「ギリギリ、セーフね」
そう、明日は僕の誕生日、もう一つ歳を加えるところだった。
中年の愛想のいい伯母さんが店の奥、といってもデパートの通路のわきにあるほんの一坪もないような部屋に僕たちを誘って、おもむろに僕の左耳にマジックで小さな印をつけた。
マイヤとそのおばさんはひとしきり早口の英語で話しあった末、確信に満ちた態度でうなずいた。
どうやら僕の運命は決まったらしい。
スプレイ式の冷却器で冷やしたと同時に小さな痛みが耳元を走った。
一分後、小さな金のピアスは僕の左耳にあった。
消毒液などを買ったあと、僕たちはハーレークリシナに行った。
ここは、トッテナムコートのそばにあり、インドの新しい宗教道場がそのビルの最上階にある。一階では自然食のテイクアウト風のレストランがありインドの臭い、そうあのターメリックの何ともいえない臭いが充満していた。
インド風の民族衣装を身につけた男は坊主頭にして旋毛のあたりだけを延ばしている独特の

スタイルで、女性はインドのカラフルな布を体に巻いたサリーを身にまとっている。
マイヤはこの場所が気に入っている。
アップルティーとバナナケーキを頼んだあと、僕たちはテーブルについた。
「どう、感じは？」
「良くわからない」
「痛くない？」
「少し痛むけど思ったほどじゃない。それより、ありがとう」
「記念すべき変身の時にプレゼントができて光栄よ」
ふいにマイヤの瞳がぶれた。
そしていま入ってきたばかりらしい入り口のあたりの集団のところで、その視線は止まった。
「誰？」
「アリエート、アリエート・ラモス。ほらアフリカのパーカッショニスト。それに彼のバンドのメンバーよ」
「……」
「今レコーディングでこちらに来ているのよ。〝フォースマインド〟って聞いたことない？」
「何、それ？」
「彼のバンドの名前、ジャズ系なんだけど、もっとエスニックでワールドミュージックってい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

うところかな?」
「ふーん……」
あまり僕はジャズやワールドミュージックには興味がない。いや、正確にいうと、嫌いではないが（事実大学時代はよくピットインやビレッチバンガードなどのジャズ喫茶に通ったものだ）いまの僕の興味の対象ではない。クラシック音楽の洗礼を受けたせいか、論理的なフォルムや構成を重視する僕の好みからすれば、自己訓練と体験、さらにフィーリングなどで左右されるインプロビゼーションに重きを置くその世界は変に拒絶したくなるのだ。

アップルティーを飲みながら曖昧な視線を送る僕の前で、マイヤは手を振って彼らに自分たちの存在をアッピールした。
「How are you?」
「Fine. Thank you and you?」
僕達は簡単な挨拶をし、レコーディングの様子を聞き、プロデューサーのやり方に対する不満などを、それは世界中どこでも同じだなどと話しあって別れた。
さきほどから僕の方をちらちら見ていたマイヤがストローから一口飲んだあと、視線だけやや上目ずかいにして切り出した。
「彼らはすばらしいアーティストよ。去年、ロニースコットで一ヵ月ライヴをやったときあた

し毎日通ったわ」
「毎日って？」
「そう、毎日。エジンバラまで追っかけて行ったこともあるんだから」
僕には信じられなかった。どんなに好きなアーティストであろうと一ヵ月も通いつづけるなんてできるだろうか？
「追っかけ……本当に？」
ふっと、六本木のテレビ朝日通りを思い出した。
そこには僕のスタジオがあり日本にいたころは毎日そこに通ってレコーディングをしていた。もちろんいまでも東京に帰ったときはそこでレコーディングしているのだが、そこでは、毎週金曜日に奇妙なものが見られるのだ。
十二歳位からだろうか？　それから十七、十八歳位までの女の子が通りに溢れ出てくるのだ。彼女たちはなぜかほぼ同じ格好をしているし、熱気――そう何かに取り付かれたような表情も似ていた。
それが人気のある某音楽の生番組に出演するタレントを一目見ようとつめ掛ける特別のファンであり、通称「追っかけ」と呼ばれている、と聞かされてびっくりしたことがある。
そしていま、目の前にいるマイヤがまるで追っかけのようなことをする、いやそれ以上のことをするなんて……。

マイヤ、艶のあるブラックとグリーンの間のような色の瞳、やや小柄で華奢に見えるがモデルのように均整はとれている。そのしなやかな動きを見ていると、まるで猫を思い出させる（事実彼女は「ダミアン」という危ない名前の猫を飼っている）。

三十歳代の前半？　まだ聞いたことはない。が、すれ違った男達のほとんどは振り返ざるを得ないし、おそらく二十歳代後半位にしか見えないだろう。

クオーター、ロシア系の血が入っている。それが不思議な雰囲気を醸し出す。

透き通るような白い肌、目から鼻にかけての線はロシア系独特の彫りの深い顔立ちだが、あごから首にかけては日本的ななだらかな曲線になる。肩に充分かかる位の髪は金髪とまではいかない程度の茶系がかっている。

日本の大阪育ち、父親が大学の教授だというから恵まれた家庭に育ったと思うがなぜかマイヤはあまり話したがらない。

知性と情熱とエキゾティズム、普段はおとなしいが興がのるとたまに大阪弁がでる。伏し目がちにたたずんでいるときの静けさと大きな身振りで話しているときの動的な差が独特の彼女の世界を作っている。

どういう経緯でマイヤがロンドンにいるのか、僕は知らない。

最初に知人を会して紹介されたとき、そのしなやかな動きと静かなたたずまいが僕の心に焼

きついた。
そのとき僕はアビーロードスタジオの3スタでソロアルバムのミックスダウンをしていた。数ヵ月苦しんだ末の結果がこの課程で決まると思うと、僕は極度の緊張と興奮に包まれていた。
そのためか紹介されたとき、僕はマイヤとほとんど話をしていない。あとでその知人に彼女が有名な、もちろん僕も知っている世界的なロックシンガーと暮らしていたと聞かされても別に感想はなかった。ただそのしなやかな雰囲気だけは僕の心に残ってはいた。

一九九二年の秋、僕は彼女に電話をかけた。
それは、自分のソロアルバムと、ワンミリオンを売り尽くす日本の最も人気のある女性ボーカリストのプロデュースを同時期に作らなければならないプレッシャーの間で（もちろんロンドンでの生活が始まったこともあって）誰か、いや誰でもよかったのかも知れないが、ヘルプ（話をする相手）を求めていたのかも知れない。
マイヤの声は優しかった。それはあまりにも自然であり、あらかじめプログラムされていたこと！　だったのかもしれない。
ホーランドパークにあるジュリーズバーは、ロンドンのトレンディーな人たち（ロンドンヤッピーか？）の溜まり場だ。
「しばらくです」

「こんにちは、久しぶりね」
「急な電話ですみません」
僕たちのアフターヌーンティーは始まった。
スコーンとミルクをたっぷり入れたイングリッシュティーを頼んだその夕暮れの時間はとても静かだった。柔らかな光に包まれて、肩のあたりにへばりついていた緊張が少しずつ溶けていった。

「アリエートは私にとって神様のような存在よ」
「……」
「彼に出会わなかったら私はどうなっていたか……」
ストローをもて遊びながら投げやりに、
「今ごろ、インドにいたりして……」
独り言のようにつぶやいたマイヤの視線は、どこかはるか遠くの地平線を見ているように虚ろだった。
なぜかその先を聞いてはいけない気がした。
進入禁止、逆走で入って行くほど僕は彼女を求めてはいない。
たまに聞こえるささやき、ゆったりした時間の流れ、このハーレークリィシナに集まってく

る人々、それはインディアだけでなく白人、ラテン系、黒人など様々だが、皆どこか似ている雰囲気を醸し出す。瞳をはっきり見開き瞬きが少ない。どこを見ているかも定かでないこの宗教関係者の従業員と黙々とラッシュやインディアンパイをほうばる信者らしき人たち。

まるでふわふわ浮いているようで、人間自身の居場所がないような、落ち着かなくさせるような何かが、彼らのどこかに貼りついていた。

それをマイヤや彼らの中に見ている僕自身にも、(その何かが)貼りついているのだろうか?

「あなたはいつも先に行ってしまうのよ」

ふいにもう一人、はるか遠くの地平線を見ているような眼差しが、問いかけてきた。

「夏子……」

「あなたはいつも一人なのよ。誰も心の中に入れないし、それを望んでもいないのよ」

「どうしたの?」

けげんそうにマイヤが僕をのぞきこんだ。

「何でもない。そろそろ行こうか」

マイヤの運転はとても男性的だ。ロンドンの道はどこも狭くたくさんの車がひしめきあっている。それに多くのドライバーはまるで親の死に目に間に合うようにとしか考えられないよう

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook